

## 日本医療団について

佐久間温巳

わが国の医療制度はその確立の当初から、自由開業医制が中心で、国民医療の大部分は開業医にまかされ、国政の一部としての医療政策はほとんどなかったと言つてよい。

しかし、第二次大戦中は総力戦体制下ということもあつて、明治以来初めて国家の主導で医療政策が進められ、その柱となつたのが、国民医療法とそれにもとづいて設立された特殊法人日本医療団であつた。

明治から大正にかけての資本主義的自由経済の發展は、当然のことながら医界にも波及し、いわゆる仁術としての医業は衰退の一途をたどつた。自由競争の激化は医療設備への投資を増加させ、必然の結果として医業の営利化、医療費の高騰を招き、また、結核治療や農山漁村の不採算医業は敬遠され、医師及び医療施設の極端な不均衡を生じた。更に、度々の戦乱や軍備拡張政策などは国民の生活を

圧迫し、医療をうけるのが次第に困難となり、各地で医療利用組合や産業組合による医療施設の建設、運営、各種健康保険による相互扶助思想の進展を招来し、これらは従来医療制度では律しきれない多くの問題を生ずるに至つた。このため九年一月（年号はすべて昭和、以下も同じ）には内務省衛生局内に医療制度調査会が置かれ、医療制度改革の検討が始まつた。

一方、年毎の徴兵検査では壮丁の体力低下が著明となり、十五年戦争遂行中の軍部に危機感をまき起し、この対策の一つとして一三年一月、厚生省が発足した。一二年七月に始まつた支那事変は次第にその規模を広げ、全面的な世界戦争不可避の認識が高まり、一三年四月には国家総動員法が公布され、総力戦体制が着々と進行し、医界でも医療関係者職業能力申告令などが実施された。

しかし、医療制度調査会の活動は遅々として進まず、一三年六月三〇日、官、公、民よりなる大規模な医薬制度調査会官制が公布され、本格的な討議が進められた。幾多の論争の結果、一四年一〇月二八日一応の答申案がまとまつたが、日本医師会などの根強い反対運動もあつて、その実

施はのびのびになつていたところ、一六年一二月八日の太平洋戦争の勃発で、一七年二月この答申は国民医療法となつて一気に議會を通過成立した。それにもとづく日本医療団も總裁稲田龍吉博士以下の役員を選定をまつて、一七年七月一日その活動を始めた。

日本医療団の事業には、

- (1) 結核の撲滅を目指し、結核療養所の統合と三年間で十萬の結核病床の建設。全国の結核療養所は一八年四月一日に医療団に統合され、各地で療養所の新・増設が計画されたが、戦争による物的・人的資源の不足で、奨健寮の設置へと計画は変更されたものの、当初目標の十萬床建設は殆んど達成できなかった。

- (2) 無医村の解消と適正な医療の提供。結核以外の一般病院の建設配置計画は、関東、関西に夫々一ヶ所の総合中央病院、各府県に中央病院、各府県数ヶ所に地方病院、無医村を中心に多くの診療所を配置するといふものであったが、これも計画通りの建設はできなかった。

- (3) 医師の再教育と適正配置・適正医療費の設定、産業都

市に多数の産院を設置することなども計画されたが、これもその完成はみられなかった。

しかし、日本医療団史によると団保有の施設は、結核療養所八四ヶ所、一万九、五三四床、奨健寮七〇ヶ所、六、八八六床、病院としては本部直轄病院四ヶ所、四一四床、都道府県中央病院一七ヶ所、二、三〇〇床、地方病院一五九ヶ所、八、〇八五床、診療所二二八ヶ所、七二一床に達した。

世界にその例をみないといわれた日本医療団であったが、その活躍なかばにして敗戦を迎え、二二年四月一日まづ結核療養所を国営に移管し、各地の地方病院や奨健寮のいくつかは地方公共団体などに売却され、二二年一月一日「医師会、歯科医師会及び日本医療団の解散等に関する法律」によつて、一部の施設と清算部門のみを残して解散した。日本医療団の財産処分、清算は五二年一二月に至つてようやく終つた。

医療団の実際の活動期間はわずか五年程であったが、戦時医療に果たした役割と戦後の医療界に及ぼした影響は大い。表面的には、結核療養所の国営化、地方自治体に向

けつがれ地方医療の向上に役立つ多くの病院などであるが、戦後の医療政策、制度にあたえた思想的影響も無視できない。これらを明らかにすることは、今日の医療政策を理解し、将来の医療政策を推進するうえで大きな役割を果たすに違いないと考える。

(西尾市民病院)

(誌上発表)

## 多聞院日記に現われる精神神経疾患の追加

中 村 昭

前回の本学会総会において演者は「多聞院日記に現われる風病の検討」という演題で発表を行なった。その際に検討したように、風病というのは大体において精神神経疾患である。今回は病名に風という文字が入っていないそれ以外の精神神経疾患を取りまとめて追加する。

前回に発表したのは、風氣、耳風、頭風、中風、風病であり、今回追加するのは、中氣、朦氣、狂氣、狐著狂氣、脚氣、目マイ、氣煩、心煩、カン煩、カンノ虫、氣力虫である。

中氣の用例は「夜ニ及ビ常如院中氣絶入ル、然リト雖、殊ナル儀ナシ」という一例だけである。この日記には前回報告したように中風の用例は多く、それは明らかに脳卒中後片麻痺を指しているが、この用例の場合の中氣というの